

説得による社会規範の変化の神経基盤

The Neural Basis of Changing Social Norms through Persuasion

世の中には無数の「社会のルール（規範）」が存在し、我々がどう振る舞うかを大きく左右する。例えば、「人のモノを盗んではいけない」というのは世界中の国や地域で共通にみられる規範である。規範は人々がそれに賛成しお互いにそれを守ることで社会の中で維持される。それゆえ、規範は昨今の禁煙規範の高まりや同性婚の容認の例にみられるように人々の意識の変化に伴って変化しうる。現代ではこのような変化の原動力として、人々がTVやインターネットのような様々なメディアを通じてお互いに意見・情報発信を行い他の人々に特定の規範に対する意識を変えるよう「説得」する過程が重要な役割を果たしている。

これまで「人が説得によって規範に対する意識を変える」という過程の裏にはどのような神経基盤があるのかはほとんど明らかになっていなかった。そこで我々は機能的磁気共鳴画像法（fMRI）を用いてこれを明らかにし規範の変化という大きな社会現象のメカニズムを脳という生物学的な視点から紐解いていくことを目指した。実験では、参加者にMRI装置の中で特定の規範、あるいは非規範的なことに対する賛成度を上げる、あるいは下げることを促すメッセージを読む、という形で説得を受けてもらいその際の脳活動を測定した（図1a, b）。説得の前後では、説得の対象となったものを含んだ様々な規範・非規範的なことに対する参加者の賛成度を測定し、説得によってどの程度それが変化したかを評価した（図1c）。また、この時の脳活動を計測することで規範に対する「賛成の度合い」そのものを表現している脳領域を特定することも行い、説得による賛成度変化への関与を調べた。

解析の結果、規範についての説得を受けている時には非規範的なことについて説得を受けている時と比べて前頭前野内側部、側頭極、側頭頭頂接合部といった脳領域の活動上昇がみられることが明らかになった（図2a）。これらは過去の研究で社会認知の様々な側面に関わることが示唆されてきた領域であり、規範に対する意識が変化する過程では規範にまつわる様々な社会的な要因がこれらの領域で処理されていると考えられる。

また、意識が変化する方向によっても関与する脳の領域が異なることが明らかになった。説得によりある規範に対する賛成度が「下がる」場合には左中側頭回の活動上昇がみられた（図2b）。ここは論理的な推論や再解釈への関与が示唆されてきた領域であり、（多くの人にとってそれに賛成していることが普通である）規範に対する賛成度を「下げる」という特殊な事態において、その妥当性を論理的に検討するあるいは規範にまつわる事柄の再解釈を行うといった認知的要請を担っていると考えられる。

さらに、我々は左縁上回には規範に対する賛成の度合いを表現している部位があることを発見し、この場所では説得により生じた賛成度の変化を反映した活動変化が生じていることを明らかにした（図2c）。

今回、我々が同定した「人が説得によって規範に対する意識を変える」というプロセスを支える様々な脳のネットワークに関する知見は、規範の変化という現象に関してこれまで主に人文科学系の分野で行われてきた研究に新たな視点や情報を提供し総合的な理解を深めることに貢献することが期待される。

（脳科学研究所 蓬田 幸人）

